実践団体・プラン基本情報

実践団体の基本情報

記入日	西暦 2025 年 1 月 17 日（2024 年度のチャレンジプラン）
プラン名	安全科と他教科等を横断することで「地震」を考える
実践団体名	大阪教育大学附属池田小学校　安全教育部
代表者名	池住祐亮
電話番号	072-761-3591
メールアドレス	Ikezumi-y50@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
実践団体の説明	大阪教育大学附属池田小学校（以下、本校）は、平成１３年に悲惨な事件が発生した学校です。その後安全教育に注力し、平成 21 年教育課程特例校の認定を受け、全国で唯一の「安全科」という教科のある学校です。
所属メンバー	2024 年度安全教育部 （代表）指導教諭／池住祐亮（担当）教諭／末廣彩華
活動の本拠地	大阪府池田市緑丘 1－5－1 大阪教育大学附属池田小学校
活動開始時期・結成時期	2024 年 4 月 1 日～
過去の活動履歴・受賞歴	特になし

プランの基本情報

プランでの実践主体	1. 学校・教育関係
プランの運営側の人数（実数）	約　20 人
プランの活動地域	大阪府池田市 このプランにおいては、2025 年 2 月 22 日本校による公開研修会にて発表することで、本校以外の教員に広めていくことが予定されている。
プランの防災教育の対象者	3. 小学生（低学年）　4. 小学生（中学年） 5. 小学生（高学年）　10. 教職員・保育士等 14. 女性　20. 全ての人々 21. その他（具体的に：　　）

防災教育の対象者の人数（実数）	約　600　人
プランが対象とする災害	1. 地震
プランの活動目的	1. 防災意識を高める　2. 災害を想定した訓練 3. 防災に関する知識を深める 4. 遊び・楽しみの要素を入れた防災 7. 災害対応能力の育成
対象者が身につく知識・技能等	1. 地震・津波・火山災害 3. 災害時に発生する課題・影響 4. 過去の教訓が教える対応策 5. 起こりうる災害の地図等による可視化 6. 平時に行う被害を出さないための備え 7. 災害発生時に身の安全を確保するための行動
プランの活動形態	4. 総合的な学習（探求）の時間 5. 教科　6. 特別活動　7. 道徳　8. 学校内の諸活動 13. 避難・防災訓練 14. 研究
プランでの連携先	1. 学校・教育関係
実践にかかった金額	約 20 万円

プランの年間活動記録

	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
4 月	2024 年度カリキュラム計画	昨年度の安全科実施カリキュラムの見直し	今年度の安全科のカリキュラム検討
5 月	安全科の見方・考え方等の共有	教科の捉えシート作成	教科の捉えシートの共有
6 月	各学年、各教科との関連の確認	各教科の教科書に目を通す	各教科「地震」の学習に結び付くところを確認する。
7 月	地震の授業実施時期等の検討	避難訓練実施計画準備提案	避難訓練実施計画確定
8 月	避難訓練の提案 震災遺構見学 （教材研究）	阪神淡路大震災について調べる	（教員が）人と未来防災センターに行く 語り部さんの話を聞く

9 月	安全科と避難訓練の往還	避難訓練のめあてを確認し、振り返りの枠を用意する	避難訓練実施、全校で振り返りを行い、安全科の学習につなげる
10 月	校外学習（4 年）	各学年で地震の学習を考える	指導案の形式にする
11 月	2・6 年安全科授業公開	異学年で校内たんけん等を行う	公開授業の後、外部評価をもらう
12 月	安全科資質・能力の共有	安全科の校内研修授業公開準備	校内研修授業後、安全科の資質・能力を共通理解
1 月	避難訓練の提案	阪神淡路大震災に関する絵本を読む	地震の学習を行う
2 月	公開研修会にて外部発表	カリキュラム表の作成	
3 月	来年度への引き継ぎ	アンケート作成	

実践したプランの内容

プラン全体の概要	このプランは本校の「安全科」のより一層の充実を図ること、本校の取り組みを発信し、安全教育を広めていくことを目的としている。本校の独自教科である「安全科」は、23 年前の悲しい事件以後、安全教育を積み重ねたことの一つの成果である。しかし、「安全科」が教科として実施されるようになった当初とは社会背景や児童の実態は異なる。「安全科」のより一層の充実を図るとは、現在の社会に合ったものに変革していくこと、児童の状況に合わせて命を大切に生きていくことのできる力をつけることである。 本校では、「地震」の学習は全学年が必ず行うものと位置付けている。しかし、これまでのカリキュラム表においては、「地震」という言葉のみの記載となっており、系統性等が見えてこなかったり、同じような内容が繰り返されていたりした。2024 年度「安全科」では、教科で児童が働かせる見方・考え方や資質・能力について、改めて定義し教

	員と共通理解した上で実施を試みた。定義することで教員間で共通の目的意識をもって学習に取り組むことができる。また、一部の教員の取り組みではなく学校組織の取り組みになるように、教員と連携することを重点においた。その成果として、「教科の捉えシート」（本校独自の各教科本質的な学びを意識するために作成されたもの）のアップデート、資質・能力の系統化、地震についての学習の系統性を整理することができた。

プランの「チャレンジ」の結果	「チャレンジ」としては、「安全科」の「教科の捉えシート」をアップデートしたことと、他教等横断するために各教科の内容を見直し整理したこと、学校組織として取り組みを進めたことである。 学校において、教員間連携を図りながら実践していくことはとても効果の高いことである。児童の実態に合わせるだけでなく、目的意識を持って教育活動を行うことは学校文化として位置付けることができ、教育活動において持続可能なものになっていく。そして、外部に発信することで各校の取り組みとなり、本校のみの閉じた学びではなくなる。11 月には 2・6 年生が合同で「地震」についての学びを公開し、外部からは異学年で学ぶよさ、各教科横断させながら学ぶよさ、児童の実態に即している点などについて評価いただいた。2025 年 2 月の公開研修会では、今年度の集大成として「安全科」の授業公開は地震をテーマにする。この 1 年間の取り組みについて外部に発信し、外部評価を受けることにより、本校に閉じた取り組みではなくなると共に、成果発表の場とも捉えられる。

実践内容・方法・成果	この取り組みに限らず、何か新しいことを学校ではじめる場合において特に意識したことは 2 つある。1 つ目は現状に合わせて進めていくこと、2 つ目は人を巻き込むことである。このどちらにも共通することはスモールステップの取り組みである。何かを始めようとするとき、一足飛びに行ってしまうと、その時は促進しているように見えるが、学校文化として残すことができず、打ち上げ花火的な取り組みに終わってしまう傾向がある。持続可能なものを目指して取り組み時には先述した 2 つは欠かすことのできない要素である。 ～実施内容～ ・れまでのカリキュラムの見直し ・「安全科」で育成したい子供の姿の明確化 ・教員連携を図る場の設定 ・学習の系統性の確認 ・「教科の捉えシート」アップデート ～方法～ ①今年度の「安全科」の方針の提示 ②各学年に依頼 （各教科内容と安全科の関連・カリキュラム表の整理） ③モデル授業公開 ④実施状況の確認 ⑤今年度の成果と課題の分析 ⑥来年度への引き継ぎ ＊これらは学校内において教員間で共通理解し、連携を図りながら進めた。 ～成果～ ・学校として方向性を一致させ取り組むことができた。 ・全体で共有しながら取り組めた。

	・公開授業で発信することができた。 ・持続可能なものを検討することができた。 ・「教科の捉えシート」等、残る形で取り組みの成果を表現することができた。 ・地震の学習において系統立てたカリキュラムを作成することができた。 ＊これらの成果はスモールステップを意識した結果である。代表者だけが取り組むのではなく、教員一人ひとりが目的意識をもって取り組むことで、児童への影響は計り知れない。今年度、現在のカリキュラムについて整理することができたことで、来年度も異なる領域の検討ができる。

プランにおける工夫：プランを実践する上で、下記について具体的に工夫をしたことはありますか。

1．【準備段階】運営側の担当者を決める際の工夫	・学校全体で取り組むことができるように計画し、実施していくこと。「スモールステップ」
2．【準備段階】地域のキーパーソンと連携する際の工夫	・地震において焦点化した内容により、外部から阪神淡路大震災に関わる語り部さんを招聘した。 ・地域に足を運び、震災遺構についても調べた。
3．【準備段階】運営側を組織化する際の工夫	・教員全体に広げる場を年に 5 回ほど設定した。
4．【準備段階】対象者や対象地域の範囲を決める際の工夫	・まずは身近なところから、そして確実に成果をできるように焦点化して実施したこと。
5．【準備段階】準備時間を確保する際の工夫	・定例の打ち合わせ以外に、各学年の代表が集まって気軽に進捗状況が言えたり、悩みが言えたりする場の設定をした。
6．【準備段階】活動場所を確保する際の工夫	・場所は学校なので特に意識ていない。
7．【準備段階】活動資金を確保する際の工夫	・特になし
8．【準備段階】知識や情報を収集する際の工夫	・安全教育の実践を視察 ・実際に震災遺構等の見学（現地調査）

	・語り部さんとの出会い
9．【準備段階】教育・訓練プログラムや教材を作成する際の工夫	・これまでの取り組みを整理・分析することからはじめた。
10．【実行段階】経験豊富なアドバイザーを確保する際の工夫	・特になし
11．【実行段階】地域の理解を得て関係機関と連携する際の工夫	・人と防災未来センター ・はるかのひまわりプロジェクト ・地域の警察 ・同じ敷地内の中学校・高等学校 これらの組織とは連携を図り、今後も取り組みを進めていくことを約束している。
12．【実行段階】活動時間を確保する際の工夫	・「安全科」の授業 ・特別活動の時間 ・低学年は生活科、高学年は総合的な学習の時間 ・職員会議で共通理解の場 ・教科部会の設定
13．【実行段階】活動経費をなるべく抑える際の工夫	・視察等のメンバ―の限定 ＊今後交代で行けるようにする
14．【実行段階】他の実践団体と交流する際の工夫	特になし
15．【継続段階】後任者を育成する際の工夫	・学校全体の取り組みとして実施したことで来年度以降取り組めるように経過を残している
16．【継続段階】活動で得られた知識・経験を、かたちにまとめる際の工夫	・「教科の捉えシート」 ・各学年「安全科」の資質・能力育成指標の作成 ・カリキュラム表（6 学年分）
17．【継続段階】活動の成果を外部に発信する際の工夫	・公開研修会 ・ホームページ
18．【継続段階】活動内容を見直す際の工夫	・今後年度末反省とアンケート実施予定

今後の活動予定・今後の展開	今年度「安全科」の体系を整えることができた。（地震のないようにおいて）焦点化して取り組むことができたこと、教員を巻き込むことができたことが成果の一つである。 よって、来年度も継続してカリキュラムの見直しを行い、充実したものにしていくと共に災害領域においてはあらゆる想定に対応するだけでなく、瞬時の判断材料を増やしたり、減災についてポインを絞って実践していく。

その他（ＰＲポイントなど）	

チャレンジプランを実践しての感想

チャレンジプランを実践しての感想・想い	本校独自教科である「安全科」を広めていき、全国の学校が安全教育の充実に向けて取り組むことを目指している。 他校との交流を今後は視野に入れながら、安全教育の充実を図る先進校として歩みを進めていきたい。